

イザヤ書30章18節 「じっくり待たれる主」

1A 待っておられる主

2A 恵みと憐れみで臨まれる主

1B 頑なな私たち

2B 憐れみにある主権

3A 待ち望む私たち

本文

私たちの聖書通読の学びは、イザヤ書 29 章まで来ました。午後に 30-32 章を読んでいきます。今年最後の説教は、とても時宜にかなったものとなります。今朝は 30 章 18 節です。「**それゆえ、主はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。**」

私たちは、イザヤ書で恐れと不安といかに戦うかについて、見てきています。その背景が、アッシリヤがユダを攻めてくるという危機があるからです。アッシリヤが今、ユダの町々を攻めて来ています。アッシリヤは北から来る大国ですが、ユダの南にはもう一つの大国エジプトがあります。エジプトに助けを呼びました。ところが、エジプトはあまりにも簡単にアッシリヤとの戦いに敗れます。それでユダは孤立無援となりました。町々はどんどん攻められて、ついにエルサレムが 18 万 5 千の軍隊に取り囲まれます。しかし、その絶体絶命の危機になるまで、彼らは本気で主に助けを呼び求めなかったという過ちがありました。

このようなユダの姿は、まさに現代の私たちの姿そのものでありましょう。自分たちで何とかできる、という自立自存の意識がこびりついていて、そして自分で何とかできるように、いろいろな頼れるものを提供しているというのが、現代社会です。便利で、安心できる社会。これ自体は良いことですが、しかし、そんな便利で安心できる社会の中で、実はじわじわと、自分たちではどうすることもできない**事柄**が押し寄せていることに気づいています。そこに、漠然とした「不安」と「恐れ」が生じます。しかし、今の社会は、その不安を何とか掻き消そうさせようと、焦らせます。「これはすれば、その不安はなくなりますよ。」と約束します。けれども、それでは不安や恐れはなくならないのです。なぜなら、「自分で何とかすれば、不安はなくなる。」という誤った前提に基づいているからです。自分で何ともならないから不安なのに、「これをすれば大丈夫です。」と何かをすることで、その不安を解消させようと仕向けるからです。恐れを消そうとする努力が、むしろその恐れが現実のものになることを招いているのです。

こうした自立自存の意識というのは、聖書の初めにかかれており、実にそれが原因で人は最初に罪を犯しました。主なる神に言われていること、主が御心としておられることを認めて、その言わ

れることに従い、そこに満足して、安心する。これが、人が神によって造られた目的だったのですが、「いいえ、私は自分でできます。」としたのが罪でした。善悪の知識の実を取って食べたらいいと誘った、サタンの誘惑がありました。自分でやっていきますよという、この姿勢をそれで作っています。そこで、「確かに、わたしが主であり、わたしが神である。」ということを示すために、主は危機を許されます。しかしそれでも、それでも豊かさや力が自分たちにあるので、それに拠り頼めば大丈夫だと思ってしまうのです。主は、ご自分の憐れみのゆえに、その中で、自分でやって何とかしようとする試みをそのままにしておかれます。そして自分の内でどうしようもなくなって、それで「主よ、助けてください。」と叫び求めるところまで、待っておられます。それが、この聖書の箇所話していることです。

1A 待っておられる主

30 章は、「反逆の子ら」という言葉から始まっています。それは、主がきちんと計画を持っておられて、主の御霊でこれらのことを運ぶことを約束しておられるのですが、彼らが、「いや、私たちはエジプトと同盟を結ぶことによって、自分たちを守ることにします。」と言って反逆しているのです。私たちが普段、「私がこれをやって、あれをします。」と自分で決めていって行く態度の中に、実はこうした反逆する心があるのです。主がお考えになっているのは、もしかしたらこんなことでないかもしれない、という想像さえしないのです。それで自分自身でやっていってしまうのです。

しかし、主は彼らからは何の助けも得られない、と言われていきます。それは恥となり、そしりとなるとまで言われます。ユダの民は、エジプトから助けを得るために南のネゲブ裁きを通っていきませんが、「エジプトの助けはむなしく、うつろ。(6 節)」と言われます。そうです、自分で何かをしようとする時に、無駄に力だけを費やします。自分の持っているものが、無駄に費やされてしまいます。

しかし、そうした神からの助言を聞きたくないのが、人間のありのままの姿です。ユダも、「私たちに正しいことを預言するな。私たちの気に入ることを語り、偽りの預言をせよ。(10 節)」と言っています。自分のしていることが、真っ向から主の御心に反しているということを思いたくないです。自分が正しいことをしていると思っていれば思っているほど、自分の思っていることを正当化してくれる助言を聞きたいと願っています。そして、聖書の言葉を曲げてまで、自分の耳に聞き触りのよいことを話してほしいと願うんですね。

そして、彼らがエジプトに頼ることによって、それがそそり立つ城壁に裂け目ができて、一気に崩れ落ちる破滅をもたらすと主は言われました。そして、主はとても大切なことを語られます、15 節です。「神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」しかし、あなたがたは、これを望まなかった。」立ち返って静かにする、そして落ち着いて信頼します。何かをしなればいけないと焦る、その気持ちとは正反対の態度です。立ち返る、というはっきりとした行為が必要です。これは、悔い改めの言葉と考えていいです。そして、主の前にいる自分の前にいます。

私たちが強制的に休む、ということをしたことがあるでしょうか？私が一度、ある姉妹のお見舞いに行った時に、その病院の雰囲気なぜかとても良く思いました。冬なのですが、とても優しい温度設定がされています。そこで、休むことによって体を回復させることが一つのお仕事である患者さんたちが、ベットにおられます。強制的にでも休むことを決めなければ、新たな力が出てこないではないかと思いました。興味深いことに、イスラエルはユダヤ人の国ですから、土曜日は必ず安息日で休みます。そこに住んでいる人は、私たちが正月で休むよりもさらに厳しく、安息日には休んでいます。それほど神を信じている人でなくとも、外に出ても、交通機関やいろいろな施設が戸を閉じているので、特に何もすることがなく、それで家族で集まって何をするとか、休むことを覚えます。このように、強制的にでも自分の活動を止めることによって、初めて主ご自身がそこにおられることを知ります。この方がすべてを掌握されていることを知ります。そして、主を待ち望むことを知るのです。そして力を新たに得ます。

ところが、ユダの人々は、「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」と言います。ところが、アッシリヤの乗っている馬は早馬で、追いついてしまう、と言います。そして、「ひとりのおどしによって千人が逃げ」と言っています。先ほど言ったように、自分で恐れを打ち消そうとすると、かえってその恐れが自分を追ってくる、恐れていることが自分の身に降りかかってくるのです。これが、18 節にある主の言葉の背景となっている話です。

18 節では、主ご自身が待っているとされています。「**主はあなたがたに恵もうと待っておられ**」るとあります。主のほうが、彼らを待っておられます。主は、彼らが自分で自分の計画を立て、それで行動しているうちは、助けを与えることができないからです。主は、信仰という媒体によって、ご自身に手を伸ばす者であれば、助けることができます。これはちょうど、溺れてしまっている人が、自分でもがくのをあきらめることによって初めて、救助する人が助けることができるのと似ています。救助する人は、その人が泳ごうとする気力がなくなるのを見計らって助けなさいと教えられると聞いています。自分で自分を救おうとしている間は、主は待っておられるのです。そして、自分では何もできないというところに立って、それで自分に死んで、主に自分の身を任せるという決断ができた時に、初めて主がその人を生かすことがおできになります。

2A 恵みと憐れみで臨まれる主

しかし、主がここで、「**恵もうと待っておられ**」とされていることに注目してください。彼らが主に對して反抗して、とことんまで突き進み、絶体絶命の危機に陥って、それで主の前によやく出てきます。その時に、私なら、「ほらっ、いわんこっちゃない。言ったとおりだっただろう？」と言ってしまう。数年前に、既にこのことは話していたはずだ。今になって気づいたのか？私は、あの時から話していたのに、あなたは気づかなかった。こんなことを言って、相手を責めてしまう、あるいは見下してしまうと思うのです。ところが、主は恵みをもって待っておられるのです。つまり、彼らがずっと後になってようやく立ち帰ろうとしても、それを快く迎え入れてくださり、受け入れてくださるということです。

キリストにある愛は、すばらしいものです。私たちの前に、悔い改めていない人がいて、それでも聖霊の助けと力によって、忍耐して待つことができます。そして、その立ち帰りが何年後になっても、それでも暖かく迎える、これまで起こったことは全て過ぎ去らせて、その戻ってきてくれたこと、悔い改めてくれたことを大いに喜んで迎え入れることができます。赦して、愛して、受け入れることができるのです。それは、主ご自身がこの私を忍耐して、待ってくださり、ようやく気づいて、それで主の前に罪を告白した時に、主が私を愛して、受け入れてくださったのを知っているからです。

多くの人は、愛というのは自分のしていることを認めてくれることが愛であると思っています。「ただ私のしていることを、認めてくれるだけでいいのです。」と言います。けれども、それは聖書では罪であると神が宣言されることであれば、当然、認めることはできません。しかし、愛は時に、「待つ」ことによって示します。つまり、何もしないのです。これもまた冷たい、と言うかもしれません。しかし、じっくり待って、待って、その人が自分のしていることが自分を破壊させてしまうところまで、それに気づいて立ち上がるができるところまで待つのです。愛をもって、忍耐して待っているのです。

イエス様は、悔い改めずにご自分をメシヤと認めないユダヤ人指導者たちに、こう言われました。「あなたがたに告げます。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に。』とあなたがたが言うときまで、あなたがたは今後決してわたしを見ることはありません。(マタイ 23:39)」主の御名によって来られる方に祝福あれ、という言葉は、メシヤを迎え入れる言葉です。イエス様に対して、この言葉を言わなければいけないところを、ユダヤ人指導者は言いませんでした。そして、イエス様が預言されたように、彼らの家、神殿は荒れ果てたままになりました。けれども、彼らはそれでも自分自身で義を立てようとしてきました。世界に散らされて、そこで迫害と困難の中にありました。そして、再び集められています。しかし反キリストが偽の平和を持ってきます。そして、前代未聞の大迫害をユダヤ人に対して行ないます。その時に、彼らはメシヤに救いを求めます。そして主イエスが来られます。そして彼らは、「祝福あれ。主の御名によって来られる方に。」と言って、その時に神の恵みを受けるのです。少なくとも、二千年という途方もない期間を主は待っておられるのです。

1B 頑なな私たち

私たちの肉はわがままです。「反逆の子ら」と主が呼ばれたように、肉は神に敵対します。自分の力で何とかしようとしてします。その肉を信仰によって十字架に付けてしまう、その信仰さえあれば、御霊が働いてくださいます。そして肉の行ないを殺すことができます。けれども、その信仰の立場に立つところまでは、主が待っておられます。

ヨナのことを思い出します。彼は、「ニネベに行って、これに向かって叫べ。」と命じられました。ところが、彼はニネベとは反対の、タルシシュ行きタルシシュの船に乗りました。主は、そこで嵐を海に起こされました。彼は、自分のせいで嵐が起こっていることを知っていました。それで、彼は船から海に投げ込まれました。そして嵐はやみました。彼は大きな魚に飲み込まれました。そして三日三晩、魚の腹

の中にいました。三日経って、ようやく彼は主に祈ったのです。「2:7 私のたましいが私のうちに衰え果てたとき、私は主を思い出しました。私の祈りはあなたに、あなたの聖なる宮に届きました。」衰え果てた時に、ようやく彼は主を思い出しました。そして祈れば、主はそれを聞いてくださったのです。恵みをもって主が待っておられました。もちろん、彼はそのように大変な思いをして主に拠り頼むことを学ぶ必要はなかったのです。すぐに主を信じてニネベに行けばよかったのです。けれども、ヨナは意地を張って、それで辛い方法で主に拠り頼むことを学んだのでした。

主は、聖霊によって私たちに、自分の肉の部分を示されます。「お前は、この部分はわたしに明け渡していないね。」と言われる部分を示されます。すると、私たちは、「この部分については、そうですね、あなたの前には持っていくのも面倒くさいので、自分でやっていきます。」と言って、その申し出を断ります。自分で何とかできると思って、そのままにしておきます。ところが、自分ではどうしようもできなくなって、それでようやく、「主よ、あなたが働いてください。」と願い出るのです。初めから主に拠り頼み、主がしてくださるところに留まっていればよいのです。

同じように、自分で何とかしようと思った人で、ダビデがいます。彼は、バテ・シェバと姦淫の罪を犯してしまいました。そして、その夫ウリヤを殺すという罪を犯しました。そして、彼は隠せたようになっていました。しかし、心の中は大変なことが起こっていました。「詩篇 32:3-4 私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髓は、夏のひでりでかわききったからです。セラ」心が、からからに渴いていたのです。しかし、ダビデが罪を言い表しました。すると、その直後に、主もあなたの罪を赦す、との宣言を受けたのです。主は待っておられたのです、罪を赦すことを待っておられました。それを頑なに拒んでいたのは、ダビデのほうです。主の前に出さずすれば、主が恵みをもって臨んでくださいます。しかし、主の前に出て行くまでは、自分の力で何とかしようとしてしまいます。

2B 憐れみにある主権

しかし、主はご自分の栄誉のゆえ忍耐して待っておられます。「**あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。**」とされています。憐れむために立ち上がられると言われます。主は、一方的に憐れみを示されるからこそ、ご自分の名が高められることを知っておられました。主ご自身が行っておられるということを示すことができます。「ローマ 9:15-16 神はモーセに、「わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。」と言われました。したがって、事は人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。」とパウロは言いました。

主はご自分のことを行われたいのです。ご自分の良き業を行いたいと願われています。そこで、私たちの行ないや努力ではなく、確かにわたしが行なっているのだということを示すために、私たちがただ信じて、この方を待ち望むようにしたいと願われています。そこで必要なのは、私たちが祈ることです。私たちではなく、主が行なわれるというところに立たせるために、主は私たちにしつこい祈りをするように召しておられます。主は、不正の裁判官の喩えを使って、しつこく裁いてくれ

るようお願いするやもめを例えにして、「ルカ 18:7 まして神は、夜昼神を呼び求めている選民のためにさばきをつけないで、いつまでもそのことを放っておかれることがあるでしょうか。」と言われました。主が何かを行なわれるということを見るまで、私たちは主の御名を呼び求め続けるのです。主は、ご自分がしたというようにされたいのです。憐れみを示したいと願われています。そのことによって、ご自身が立ち上がるのをお見せしたいのです。

3A 待ち望む私たち

そして、「**主は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。**」とされています。主を待ち望むことは、幸いなのです。主が、すべてを掌握されていることを認めることは幸いです。自分ではなく、主が行なわれていることを認めることです。どんなことが起こっても、それが自分の肩にかかっているのではなく、主ご自身の肩にかかっていることを知ることは必要です。それで、周りの人は「なぜ、あなたは行動に移さないのですか。」といら立ちます。ちょうど、嵐になっているのに舟の中でぐっすり寝ているイエス様のようにです。あるいは、「物事は、そんなに単純ではない。主に拠り頼めばすべて解決するのか？」と言われてしまうでしょう。しかし、やはり単純なのです。主は、ご自分の御霊の力を、ご自分をそのまま信じる者たちに示されるのです。

私たちに必要なのは、信仰です。私たちの前に、厳しい現実が立ちはだかっています。それはまるで、全く動じない石のようにも見えるし、干からびた死体のように見えるかもしれません。しかし、神の救いの約束がもう一方であります。現実と神の約束の間には、大きな隔たりがあるのです。その間を埋めるのが、信仰です。信仰をもって祈る時に、主が動いてくださいます。なぜなら、主はその祈りを待っておられたからです。私たちが祈りに拠って神を動かしたのではなく、神が祈りを通して私たちを動かしたいと願っておられたのです。